



筑波書房

まえがき

—農学徒としての50年を振り返って—

2015年は戦後70年、私が東京教育大学農学部に入學して50年の節目になる。いま時代は大きく変わろうとしており、戦後の70年間は明らかに一つの時代として捉えなければならない時に至っている。

私の農学50年については個人的なことにすぎないが、しかし、この50年は、実は日本農学史において一まとめとして考えるべき一時代となってきたようにも思う。

私が大学に入學した頃（1965年）の日本の農業は、田んぼの田植えはすべて手植えで、稲刈りはすべて手刈り、乾燥はすべて天日の自然乾燥だった。耕耘は、牛馬耕の最後の時代で、主流は小さな耕耘機だったが、しかしまだ田んぼではトラクタは使われていなかった。田んぼの区画整理は10a区画で、まだそれも実施されていないところが多く残されていた。大学の農場実習では堆肥作りもやったが、ビニールハウスも建てた。ハウスは垂木（たるき）の木骨のものだったが。江戸時代のころから続いていた昔のままの手作業農業が残る最後の頃だった。

大学院を修了して母校の助手になったのは1972年だが、その時には私が通っていたむら（千葉県成田市南羽鳥）でも歩行型田植機が入り、刈り取りにはバインダが入り、馬耕農家はいなくなっていた。

以来、農業は機械化、施設化、農薬や化学肥料などの化学化がほぼ一直線に展開されてきた。田んぼでは1ha区画の大型基盤整備が進み、8条植えの乗用田植機、6条刈りの高性能コンバインが走り回り、田植え稲刈りのかつての農繁期にも田んぼには人影はあまり見られなくなっている。

政府はグローバル化を推進しつつ、1万円/60kgを大きく割り込むような低米価を当然のこととして、そういうなかで新式の高性能低コスト稲作でアメリカやオーストラリアの巨大稲作と対抗するのだと平然と言っている。こ

れて日本稲作は相当程度壊れていくだろう。

この50年は農家が地域の仲間とともに頑張ってきた時代だった。いまその時代も一つの、誠に困った区切りを迎えているように感じる。

まったく偶然だが、上述のように私は「いま」の始まりの頃のことも少しは体験している。明治、大正生まれの大先生の警咳にもわずかだが接することができた。昭和ヒトケタ世代の農家たちの逞しい頑張りとも間近におつきあひすることができた。一般的に言えばそんなことはどうでも良い個人的な体験なのだが、しかし、私たち世代のこの偶然が、冷静に見て、一般的な文脈において少しの特別な意味を持つようにも感じている。私たちが先生方や先輩たちに従いつつ体験してきたことを、ある程度整理しながら次の世代に語り継ぐことに時代的な意味があるのかもしれないと感じるようになってきた。遅きに失したとの思いもあるが、つたない体験、不十分な著作を集めて本書を編むことにした次第である。

私はこの50年、農学の研究教育の場で生きてきた。その居場所は中枢ではなく、いつも少し脇役でアウトサイダー的だった。私には地を這うような歩みはできなかった。いつも陣営の内部にあって、しかし斜め下側から、できるだけ現場の農家と寄り添いつつ、野の道を歩きながらこの世界を見つめてきた。良くも悪くもそれが、私にできる、私が教えられた「総合農学」の道だと考えてきた。そんな思いから書名は「野の道の農学論」とさせていただいた。副題の「総合農学」については第1章で詳論したのでそれをお読みいただきたい。

本書は既発表の論文集なので、各章のはじめに執筆のねらいや背景などについて「はしがき」を付した。なお、注や引用参考文献等は各章節の末尾にまとめて示したが、第3章第2節については項ごとに分けて示した。不統一ではあるが、この節の記述は先行研究の検討部分が多く、それぞれの項で文献等を示した方が分かりやすいと考えたからである。また第5章では文献は文中に書き込んだ。文章の性格として文献等の注記が馴染みにくいと考えたためである。

野の道の農学論—「総合農学」を歩いて—目次

まえがき—農学徒としての50年を振り返って—	3
第1章 戦後農学史における「総合農学」	
—農家とともに歩む農学への模索—	9
第1章 はしがき	9
1. はじめに	11
2. 「総合農学科」の誕生と展開	12
(1) 「総合農学科」の概要	12
(2) 「総合農学科」誕生の経緯	14
(3) 「総合農学」の展開	17
3. 「総合農学」論をめぐる	26
4. 「総合農学科」の解体、廃止	37
5. 戦後農学史における「総合農学」	45
第2章 昭和戦後期における民間稲作農法の展開	57
第2章 はしがき	57
1. はじめに—戦後農業技術史論への視点—	59
2. 健苗稲作の本流—寒地型の黒沢式稲作—	61
3. 地力増強・多毛作型暖地稲作—松田式革新米麦作法—	65
4. 微生物発酵肥料の活用—島本式稲作心土栽培—	69
5. 民間稲作農法の特色と評価	73
(1) 民間稲作農法の全国的展開状況	73
(2) 育苗技術の評価をめぐる	77
(3) 肥培管理技術の評価をめぐる	80
(4) 作付体系技術の評価をめぐる	83
(5) 技術の普及性をめぐる	84
6. むすび—喪われた民間農法の復権のために—	86

第3章 地形や土壌の条件と土地利用の諸相	91
第3章 はしがき	91
第1節 野菜は都市でつくるもの	94
第2節 地形・土壌立地と畑作農法の類型—埼玉県畑作を事例として—	96
1. はじめに	96
2. 地形・土壌立地と畑作農法	102
(1) 地形・土壌立地と農法類型	102
(2) 地形・土壌立地に関する既往の農法論研究	105
(3) 地形・土壌立地と野菜の栽培技術研究	108
3. 低地畑と台地畑の畑作農法	113
(1) 低地畑と台地畑の開発・土地利用略史	114
(2) 低地畑と台地畑の畑作農法	124
4. むすび	135
第3節 低地畑地域の畑利用方式—茨城県那珂川下流域の事例—	137
1. 低地畑地域の畑利用方式の特徴	137
2. 坏畑野菜産地の形成	140
3. 坏畑野菜産地の展開と再編動向	143
(1) 岩根地区	144
(2) 中河内地区	146
(3) 吉沼地区	149
4. 低地畑地域の土地利用の展望	151
第4節 霞ヶ浦の水源地としての谷津田の構造と保全	154
1. はじめに	154
2. 関東ローム層台地を主な水源とする霞ヶ浦	155
3. 霞ヶ浦台地の伝統的土地利用	156
4. 高度経済成長期以降の新しい土地利用	159
5. 農業空洞化と耕作放棄地の広がり	161
6. 林野利用の変遷と実態	163
7. 谷津田の存在と構造—特にその源流域に注目して—	163
8. 耕作放棄される谷津田の源流部	166

9. 市民参加の谷津田再生＝谷津田耕作と自然共生型地域づくり の展望	169
10. 市民参加による谷津田再生＝谷津田耕作の可能性	170
第5節 関東地方平地林の農業的利用と都市的緑地利用の事例	172
1. はじめに	172
2. 関東地方の平地林の現況	174
3. 平地林の利用構造の原型	177
4. 平地利用の崩壊と新規需要の形成	180
5. 調査事例	187
(1) 茨城県筑波郡豊里町（現つくば市）	187
(2) 埼玉県川越市福原地区	194
(3) 神奈川県横浜市	199
6. むすび	204
第6節 山村における農業的林野利用—岐阜県白川町黒川の事例—	209
1. はじめに	209
2. 聞き書き	210
(1) 古田行雄さんの話	210
(2) 藤井甲三さん キヌさんの話	214
(3) 西尾勝治さんの話	217
3. 黒川における山林利用の変遷	221
4. まとめてかえて	226
第4章 農村のゴミ問題と循環型社会論	229
第4章 はしがき	229
第1節 立ちどまって考えてみたい「循環型社会」論議	231
1. ブームとしての「循環型社会論」	231
2. 農業・農村は都市の生ゴミを必要としているのか	234
3. 都市の生ゴミリサイクル事業に農業・農村はどう対処すべきか	237
第2節 有機農業と資源循環論	240
1. 有機農業の基本理念と循環論	240
2. 分業的循環論と統合的自給論	242

3. 循環論的な生ゴミ対策はまずは都市内部の取り組みとして	244
4. 農業・農村における有機物資源の循環利用の課題	246
第3節 農村環境政策の基本的枠組み	248
第4節 緊急特集 田舎が危ない!	251
第5章 農耕文化論	257
第5章 はしがき	257
第1節 あえて農業を選ぶ若者たちの登場	260
第2節 地人の道を歩もうとした宮沢賢治—農業技師という側面から—	265
はじめに	265
農業技師としての賢治の歩み	266
賢治の農事詩	271
「農業労働詩」の断片から	272
「稲作詩」への展開	277
未完の賢治の道—宮沢賢治と有機農業—	279
第3節 「農耕文化論」の落とし穴	288
第4節 東北アジアの水田農業の歩みとこれから	294
1. 東北アジア稲作形成の骨格をめぐって	294
2. 国際貿易資源となった東北アジア稲作	296
3. 地域自給の基礎としての東北アジア稲作	297
4. 農業のバランスのとれた発展と有機農業	298
第5節 平和こそ農と食の大前提	301
付 山上憶良 貧窮問答の歌 口語訳	304
あとがき	307

野の道の農学論—「総合農学」を歩いて—

2015年7月15日 第1版第1刷発行

著者 中島紀一
 発行者 鶴見治彦
 発行所 筑波書房
 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館
 〒162-0825
 電話03(3267)8599
 郵便振替00150-3-39715
<http://www.tsukuba-shobo.co.jp>

定価はカバーに表示してあります

印刷/製本 平河工業社
 ©Kiichi Nakajima 2015 Printed in Japan
 ISBN978-4-8119-0469-6 C3061